

# いの流水俳壇

## 「当季雑詠」

松尾 満津於選

絵手紙の炎<sup>も</sup>えてはみ出す曼珠沙華

友草 水月

(評) 曼珠沙華は彼岸花ともいう。田畑の畦畔に、道野辺等に群生して咲く。真赤に咲いた花の絨毯は秋を代表する風物詩。便箋<sup>びんせん</sup>一ぱいに描かれてはみ出す曼珠沙華。作者は長年教職にあつたので、教え子たちの絵手紙も多いことであろう。この句の絵手紙もその一つ。

脱穀の初<sup>はつ</sup>の重さを掬いけり

刈谷 志津

(評) 情景がよく見える句である。この句の特徴は、初<sup>はつ</sup>の量を容量でなく、重量で実感として捉えたことである。句の中で、その仕種が一目瞭然。収穫のよろこび、その時の気持を赤裸々に伝えている。

禅寺の魚板のへこみ椿実に

井上 郁子

(評) 京都府宇治市に黄檗宗の大本山万福寺がある。この句の寺であるかどうか、わからないが、句の形姿<sup>なりかたち</sup>からしておそらく万福寺のことであろう。魚板は禅寺が時刻を知らしめたり、行事の前後に合図として打ち鳴らす道具として使用されている。万福寺の魚板は句にあるとおり大きく、へこんでいる。椿の実も中旬頃を過ぎると卵大の真丸い実が割れて、中から三ツ、四ツの種がこぼれ出る。堅く厚い板で作った魚板であっても長年月叩き鳴らせば窪みも深くなる。この句はそんな因果の取り合わせであろう。「裂けそめし種の力や椿の実」という「季發」の句がある。

秋の夜言葉が多過ぎて寂しい

秋田 律子

(評) 秋の夜の自然諷詠である。個性を生かして対象に身をひらいている、伝統俳句のもつリズムはないが、これが現代俳句の特徴であるとすれば、この句に似合う表現はむつかしい。句の情景、作者の置かれた立場、存在がよく伝わる句である。リズムとか字数を問う以前に、何となく作者の気持の伝わりを感じさせ納得できる。

晩稲の残る二枚田の明るさよ  
掛稲や畦で受け取る宅急便  
子供等の内緒の話烏瓜  
秋風や用無く木戸を出入する  
夫の気嫌良き日はうれしむかご飯  
木犀や甘い香りを手にとりて  
名月を眺め眺めの散歩かな  
字の読めぬ児は絵だけ見る秋灯火  
秋高し賑々と立つ出湯の旗  
よく通る物売りの声秋高し  
旧姓でなつかしうれし萩の風  
秋草や遠流の島に能舞台  
鳩群れて落穂啄む刈田かな  
台風も事なく過ぎし大師堂  
百才の豊饒<sup>かしくやく</sup>たるや山椒の実

竹崎 光子  
川村 博子  
岡本とも子  
大川 節弥  
津田 久美  
森岡 照月  
中野 好子  
間 浩太  
片岡 包女  
筒井 一平  
弘瀬うき子  
伊藤 たみ  
筒井 文  
川村 愛  
松尾満津於

次 題 「当季雑詠」  
締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

867-2133

平成20年度

財団法人日本宝くじ  
協会助成事業

平成20年度財団法人日本宝くじ協会の自治宝くじ普及宣伝事業の助成を受け、本川総合支所にコミュニティバス(トヨタハイエース15人乗り)を配備しました。

過疎高齢化が進む山間地域で安心して生活をするために、通院・買い物等の移動、町行事や老人クラブ、婦人会、地区集会、保育園児・児童生徒の各種行事の送迎等に活用し、住民福祉の向上を図ります。宝くじの収益は、教育施設、社会福祉施設の建設・整備事業、市町村振興事業など広く公共のために使われています。

